

針と糸によって作られるものには、目には見えないものへの信仰心が宿っているように思う。その祈りは、たくさんの人には共有されにくい。しかしある土地の、ある時間の中では必然の行為なのだ、まぎれもなく。

それは時に、人が生き抜くためのものとなる。だからこの祈りのかたちは生命力のかたまりと言ってもいいのかもしれない。ここにあるのは誰かの物語。その祈りの声が聞こえてくるように、私は今日も綴り、縫う。

本田莉子